

地域で子どもを見守る 令和の駄菓子屋さん

こども家庭庁では、「地域のつながりの希薄化や少子化の進展により地域の中でこどもが育つことが困難になっている」ことを挙げ、「価値観の多様化やそれを受け入れる文化の広がりに伴い、居場所への多様なニーズが生まれている」としています(※1)。共働き世帯が主流となり、家庭の中だけで子育てを行うのは難しい現代社会において、地域全体で子どもを見守る取り組みが重要になってきているのではないのでしょうか。

そんななか、昔ながらの駄菓子屋さんを令和に復活させ、地域で子どもを見守る取り組みをしている団体があります。「ひがしんち」の二村久乃(にむら ひさの)さんに聞きました。

※1「こども・若者の居場所づくりの取組」(2025年4月24日こども家庭庁成育局成育環境課)

子どもたちの居場所をつくろう

2024(令和6)年9月、子どもたちのための居場所として、島田市東町地区に「ひがしんち」がオープンしました。近年、市内の学校が縮小傾向にあるのに対して、東町を含む六合は児童生徒数が多い地区です。しかし、住宅地にはコンビニやスーパーばかり。子どもたちが自由に居られる場所がありませんでした。

そんな折、東町地区社会福祉協議会で行った住民アンケートで、「公会堂に駄菓子屋ができたらいいな」といった市民の意見が寄せられました。その声に地元の高齢男性が共感したんです。昔ながらの駄菓子屋は、地域の住民が自宅などを活用して駄菓子を販売しており、当時の子どもたちにとってはたまり場・遊び場でした。駄菓子屋なら、子どもたちが居場所として滞在しても迷惑にならないと思います。保護者からすれば、親の仕事が終わる時間帯まで、大人たちが子どもを見守ってくれることは、心強いです。地域の公会堂と

いう場所も、安心感があります。それで「東町地区でやってみようか」ということになりました。

市内で駄菓子屋コミュニティを営んでいる自治会活動の情報を聞きつけました。さっそくその自治会を視察し、「ひがしんち」の活動のイメージを膨らませました。

「ひがしんち」の体験が子どもたちに与える影響

「ひがしんち」は、保育園・幼稚園児から小学校中学年くらいの子どもたちが利用しています。きょうだい、親子での利用もあります。月2回の開催で、毎回20〜30人くらいの子どもたちがやってきます。

販売する駄菓子は、スタッフが自ら静岡市まで行き、仕入れていきます。夏はスタッフが私物のクーラーボックスを持ち寄り、冷えた飲み物を用意しています。

ほかにも、くじ引きなどのイベントを定期的に開催するなど、子どもたちを飽きさせない工夫をしています。子どもたちは、限られたお小遣いのなかで、何にお金を使い、



スタッフが仕入れた駄菓子

何を我慢するのか考えます。「今日はこれだけしか持っていないから、くじ引きは我慢しよう。」といった判断をしたり、自分のお金で欲しいものを買ったりと、「ひがしんち」の体験が社会勉強として、少なからず子どもたちの成長に影響していると思います。

高齢者スタッフの活躍

スタッフのほとんどは、延寿会（島田市いきいきクラブ連合会）に所属する高齢者です。70代以上が多く、子どもたちにとっては祖父、曾祖父母の世代になります。子どもたちが安全に過ごせるよう、見守りをしたり、話し相手になったりしています。子どもとの世話をするというよりも、同じ町に住む大人としてフランクに関わっています。

スタッフは主に、駄菓子を買いたい子どもたちへの声かけや、会計を担っています。駄菓子屋の運営は金銭のやり取りがあるため、子どもたちと一緒に、合計額やおつりの計算など確認しあいながら販売しています。輪投げや射的といった、昔ながらの遊びで子どもたちと関わっている人もいます。デザインが得意な人は、「ひがしんち」のロゴを考えたり、チラシを作ってくれたりします。あらかじめ役割を話し合ったわけではなく、自然と各々が得意とする場に関わっています。今後もスタッフの



子どもたちと確認し合いながら駄菓子を販売

特技を活かして、子どもたちと関わる機会を増やせるといいなと思います。

これから子どもたちのために

六合地区は広いので、離れたところに住む子どもにとっては、なかなか利用しにくい側面があります。それでも、利用する子どもたちが増えるよう、少しずつ状況に合わせて改善を重ねていきたいと思っています。「ひがしんち」が、今後も子どもたちにとって楽しく安全に過ごせる場所であり続けていきたいです。

取材を終えて

「ひがしんち」の活動は、核家族や共働き世帯が増えた今、地域と子どもをつなぐ重要な取り組みだと感じました。

子どもたちにとって、家族以外の大人と関わる機会があることが、地域への愛着を持つきっかけになるかもしれません。

多様化する現代に対応していくためには、地域で子どもが育つ仕組みづくりが解決の糸口になるのではないでしょう。

支援をかたちに

「てとて」がつなぐ

地域とひとり親世帯

静岡県におけるひとり親世帯の88.0%は母子世帯である。母子世帯の総収入額では、250万円未満の世帯が全体の43.7%を占め、経済的に困窮している様子がうかがわれる。静岡県では、生活費補助や教育支援、就労支援など、ひとり親世帯に対して多岐にわたる支援策を講じている。しかし、ひとり親の7割以上が「支援があることを知らなかった」と回答するなど、情報が届かず、支援につなぐりにくい世帯も少なくない。(※1)

静岡県駿東郡長泉町を拠点に、ひとり親世帯や困窮世帯に向けて支援を行っている民間団体「フードバンク『てとて』」代表の金井淳子さんに、活動について聞いた。

※1 令和6年度 静岡県ひとり親家庭生活実態調査



金井 淳子(かない じゅんこ)さん
「フードバンク『てとて』」代表

活動のきっかけは防災食

10年程前から、長泉町で子育てをするなかで出会った仲間と立ち上げた子育て支援サークル「なごみカフェ」で、子ども服や制服リユースの活動をしていました。自分たちの子どもの手が離れたら「いつかこども食堂をやりたいね。」と仲間と話していました。

2019年末からのコロナ禍で、状況が一変。人が集まるのは難しくなりました。そんな時、ある自治体が備蓄していた防災食を廃棄する、という話を聞きました。「まだ食べられるのに、廃棄するのはもったいない。」と、2021年11月に「なごみカフェ」のメンバーと「フードバンク『てとて』」を立ち上げ、まずは防災食の配布会を始めました。

配布会には思った以上に人が集まりました。その様子をブログやSNSで報告すると、それを見た近隣企業や個人の方々から食料品の寄付の申し出を受けるようになりました。

現在スタッフは18人。すべて無償ボランティアで、今もなんとか定期開催ができています。

ひとり親家庭へ支援を広げる「てとて食堂」

「フードバンク『てとて』」から更に支援を広げ、2022年、ひとり親家庭や非課税世帯の子育て家庭向けに「てとて食堂」を新設し、お弁当の配布を始めました。

「てとて食堂」は1〜2ヶ月に1回、長泉町福祉会館のボランティアルームを借りて、約15〜16世帯分、50食のお弁当を作っています。お弁当は予約制で、食中毒などの危険を考慮し、直接取りに来ることができる長泉町民限定で配布しています。

利用者層は母子世帯が圧倒的に多く、リピート率は9割。困難を抱え続けている家庭が多いと感じます。実際に利用者から、「固定費はもう削れないので、食費を削るしかなかった。」という声が多く寄せられています。

お弁当を配布することで、利用者から直接困りごとを聞く機会もできました。子どもの高校進学などの費用を捻出するのが難しいという家庭の話聞いたときは、社会福祉協議会につないで融資を受けられるようになった例もありました。

「てとて食堂」が、支援を必要とする人と行政をつなぐ役割も担っているのは、とても良かったと思います。

支援を「したい」人の窓口も

「ひとり親家庭や困っている子どもたちに支援をしたいけど、何から始めていいのかわからない。」という人は多くいます。

「フードバンク『てとて』や『てとて食堂』では、SNSなどで食料品寄付の窓口(受付日時、場所、連絡先)を明確に発信しています。

そうすることで、地元企業、団体、個人の方などから、幅広く寄付を受け取ることができています。食料だけでなく、タオルや文具などの日用品や、「子どもたちの未来のために使ってください。」と、現金の寄付をいただくこともあるんですよ。

運営に関しても、行政のほか、地元企業やロータリークラブなどの地域のネットワークにとっても助けられています。物資の在庫を置くための倉庫を無償で貸してくれる企業もあります。

支援をしたい地域のみなさんの窓口になることも、私たちの大切な役割だと思っています。

支援は続けていくことが大切

配布会の告知は、長泉町の広報誌「広報ながいずみ」掲載のほか、公式LINEやInstagramなどを活用しています。お弁当の予約はGoogleフォームを利用し、事務作業に時間が取られすぎないようにしています。スタッフはみんな、子育てや仕事で、日々

時間に追われている身なので、手間を省くという面でDX化(※2)を頑張っています。

お弁当は手作りにこだわることなく、補助金(※3)や寄付金を活用し、暑い夏の間は市販品にするなど、スタッフで相談をして、無理なく続けられる形を常に模索しています。支援には継続がなによりも大切だと思っていますからです。

これからも、困難を抱えているひとり親世帯のために、地域と協力して支援活動が続けていきたいです。

※2 DX化(デジタルトランスフォーメーション)
AIやIoT、ビッグデータなどのデジタル技術を使って生活やビジネスを変えること。
※3 長泉町子育て支援団体活動促進事業費補助金

令和7年度 第11回・第12回 フードバンク「てとて」 食品寄付のご協力をお願いします！

受付できない食品
開封されているもの
賞味期限が1か月を切っているもの
冷凍・冷蔵保存食品
生鮮食品(生肉・魚介類)
アルコール・ペットフード

受付できる食品
以下①～③を全て満たしている食品のみ受け付けます
①未開封・未使用のもの
②賞味期限が明記されており、1か月以上残っているもの
③常温保存できるもの
※砂糖・塩は長期保存可能なため、賞味期限の記載が無くて可

食品を集めます！

2025 第11回
6/19(土)・20(日)
10:00-15:00

2026 第12回
2/19(土)・20(日)
10:00-15:00

※予約不要、直接現場へお持ち込みください
※小雨決行・荒天中止

収集場所：長泉町福祉会館ボランティアルーム
(長泉町下土狩963-1) ※第6駐車場をご使用ください



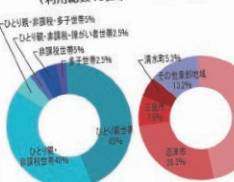
食品が必要な方はこちらをチェック！

2025 6/21(日)
11:00-15:00

2026 2/21(日)
11:00-15:00

対象：18歳以下又は大学生以下のお子さんのいるひとり親世帯・非課税世帯
配布は予約制です
てとて公式LINEを登録し、
案内されるグループチャットにご参加ください
お申込み期間：第11回 6/1～6/10
第12回 2/1～2/10
※記録簿多数の場合はお取り願ひの順に優先します

＝過去開催時の実績＝
第10回 2025/2/22 利用者の分布
(利用総数40世帯・子ども78名)



フードバンク「てとて」とは、一般家庭で使えない食品や、企業の包装や印刷ミスで傷がついてしまったり売りに出せない食品の寄付を募り、食料を必要としている施設や団体、困窮世帯に無償で提供する活動を行う民間のボランティア団体です。まだ食べられるにもかかわらず廃棄されてしまう食品の削減(フードロス削減)と、子育て中の困窮世帯、ひとり親世帯・多子世帯などお困りの方への食糧支援を目的に活動しています。皆様のご協力・ご支援をお願い申し上げます。

ブログやインスタなどで活動内容を公開しています

主催／フードバンク「てとて」 問い合わせ／てとて公式LINE 又は メール foodbank.tetote@gmail.com
後援／長泉町社会福祉協議会・長泉町

食料品寄付の案内チラシ

取材を終えて

ある日突然、ひとり親になってしまった。経済的にも不安定な状況で、これからどうしたらいいんだろう。「ひとり親に対する支援があることを知らなかった」という人が少しでも減るように、まずは母子世帯をはじめとした、困っている人の現状を知ることが大事ではないだろうか。

そして、「困っている人」と「助けたいと思っている人」をつなぐ「てとて」の取り組みがこれからも続くことで、誰もが安心して住み続けられるような地域をつくっていけると良いなと思う。

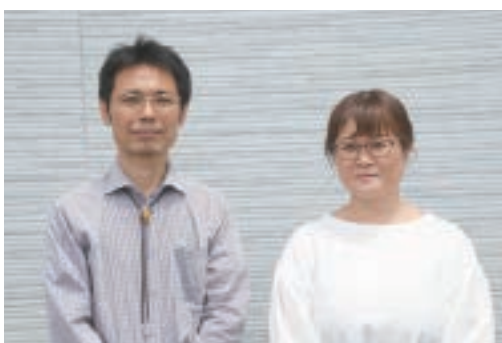
知ってほしい 里親のこと

日本における社会的養護が必要な子どもの数は、約42,000人といわれている(※1)。
自治体では里親制度の普及啓発活動が行われているが、依然として「里親制度の社会的認知度が低く、新規委託可能な登録里親が少ない」という課題がある(※2)。

「ふじ虹の会」(富士市・富士宮市の里親の会)の坂間多加志さん、河野亜紀さんに、会の活動や、里親となり見えてきたことについて聞いた。

※1 こども家庭庁支援局家庭福祉課「社会的養育の推進に向けて」2023(令和5)年4月

※2 こども家庭庁「里親等委託の推進について」2024(令和6)年



ふじ虹の会(富士市・富士宮市の里親の会)

坂間 多加志(さかま たかし)さん **元会長、現会計**

社会福祉士。静岡県里親連合会理事。

一般社団法人レインボーフォスターケア理事。

NPO法人インターナショナル フォスターケア アライアンス理事。

河野 亜紀(こうの あき)さん **副会長**

助産師・看護師。令和7年7月に助産院幸を立ち上げる。

不妊治療患者や特別養子縁組を考える人たちに自身の経験を生かし寄り添う支援を目指している。

用語説明(出典:こども家庭庁HP)

社会的養護

保護者のない児童や、保護者に監護させることが適当でない児童を、公的責任で社会的に養育し、保護することともに、養育に大きな困難を抱える家庭への支援を行うこと

<https://www.chago.jp/policies/snakeki-yougo>

里親制度

それぞれの事情で家族と離れて暮らす子どもを、自分の家庭に迎え入れ、様々なサポートを受けながら、温かい愛情と正しい理解をもつて育てる制度

※「里親の種類や「里親になれる条件」など詳細は、こども家庭庁HP「広げよう『里親』の輪 里親制度を知る」<https://satoyanawa.jp/about/>をご覧ください。

「ふじ虹の会」の活動

坂間 2011年に、富士市で「ふじ虹の会」を設立しました。活動内容は、里親家庭の相互交流のほか、里親の制度上の問題や課題を話し合い、行政に上申したりすることです。また年1回フォーラムを開催し、児童養護施設と保護される子どものリアルな状況を伝えています。

会員数は、立ち上げ時は20世帯以下でしたが、今は約50世帯になりました。

河野 里親に関する啓発活動は「里親支援センター(※3)いろり」が主体的に行っており、「ふじ虹の会」はそこに協力するかたちで関わっています。

坂間 富士市は地域のつながりが強く、ほかにも行政、児童相談所、児童養護施設など、さまざまな専門機関と連携しています。

※3 里親支援センター

里親支援事業を行うほか、里親及び小規模住居型児童養育事業に従事する者、里親に養育される児童並びに里親になろうとする者について相談その他の援助を行う施設

出典:こども家庭庁「里親支援センター及びその業務に関するガイドライン」について

子どもを迎えた背景

坂間 我が家では、長期委託や一時保護を含め、これまで10人の子どもの里親として受け入れてきました。元々は妻が「里親になりたい」と希望していて、最初に子どもを迎えたのは、私と妻が20代の時でした。私も妻も児童養護施設で働いていた経験があり、社会的養護を必要とする子どもたちの存在を知っていました。お互いに子どもができていくいきいき事情もありました。

周囲からは「二人ともまだ若いのだから、もう少し考えても良いのでは。」という意見もありましたが、最終的には自分たちの決定に賛成してくれました。

河野 私は不妊治療を続けたものの子どもがでえず、49歳の時に特別養子縁組(※4)で1歳3ヶ月の子どもを迎え、今年の7月で5歳になりました。

ほかにも、児童養護施設にいる子どもなどを、里親として一時的に受け入れています。

里親や特別養子縁組で子どもを迎える人の多くは、40代後半から50代です。私のように、子どもができなかった、それでも子どもを育てたい、という思いを持つ人が多いです。

※4 特別養子縁組

子どもの福祉の増進を図るために、養子となるお子さんの実親(生みの親)との法的な親子関係を解消し、実の子と同じ親子関係を結ぶ制度

出典:「子ども家庭庁Hd

<https://www.cfa.go.jp/policies/shakateki-yougo/tokubetsu-youshi-engumi>

実親(生みの親)にも支援を

坂間 社会的養護が必要な子どもの事情を知ると、その子の実親をもっとサポートする必要があるな、

と感じています。

河野 幼少期にいつも大人に怒られていた経験から、大変なことが起きてしまっても現実を直視できず、何も考えられなくなってしまう人も多いです。予期せぬ妊娠をしてしまったけれど、そのことを誰にも相談できなかった、という生みの親もたくさんいて、何もできずにどんどんおなかが大きくなっていく。新生児遺棄といった悲しいニュースが取り沙汰されることがあります。それは生みの親だけの責任ではありません。生みの親も被害者なんです。生みの親を適切にケアすることができなかった社会構造に問題があると思います。

坂間 「育てられないのに子どもをつくるな。」といった声が、世間にはあります。でも、多くの生みの親が、母子手帳に子どものことを細かく記入しています。子どもへの思いがあるんです。人によって事情はさまざまです。

河野 特別養子縁組で迎えた我が家の子どもの名前は、生みの親がつけてくれました。私はその名前がすごく好きで、生みの親に感謝しています。

里親が人生の選択肢を広げる

坂間 日本は「お父さん、お母さんがいて子どもがいる」という家族観が、まだまだ根強いんです。しかし、法律的に夫婦でなくても、同性のパートナー同士でも、独身でも、里親になれる要件が満たされており、研修を受けて、養育を手伝う人がいれば、里親になれます。私たち夫婦のように、20代で里親になることもできます。妊娠・出産を経験しなくても子育てをする、という人生も、一つの選択肢として広がってくれば良いな、と思います。

既に実子がいいて、子育てを経験している人も良いと思います。そういう人は、地域の幼稚園や小学校の状況を知っているし、子育てに関する情報も把握していますから。

河野 私は「ふじ虹の会」の活動をとおして、たくさんの方と関わりができました。子ども同士のつながりも増えました。みんな協力して子育てをしていくのが楽しくて仕方ないです。

坂間 里親・里子であることを、あまり知られたくない、と考えている人もいるかもしれません。

しかし、大人が変に隠そうとしていると、子どもは何も悪くないのに、あたかも悪いことをしているように思わせてしまう。子どもにそんな印象を持たせてしまうのは良くありません。だから、里親に関する情報はオープンにすることが大事だと私たちは考えています。私たちの活動とおして、里親制度に対して世間が感じているハードルが低くなれば良いな、と思います。

取材を終えて

「里親支援センターいろり」では、里親制度の普及啓発イベント「さとおやCAFÉ」をドラッグストアなどで開催している。そのチラシに「お買い物のついでにぜひお気軽にご来場ください!」と書いてあった。実際、買い物中のおばあちゃんや、不妊に悩む夫婦が立ち寄ってくれたという。

この話を坂間さん、河野さんから聞いて、「里親って身近に考えていいものなんだ」と、私自身の里親に対するイメージが変わった。

里親制度の認知と正しい理解が広がることで、従来の「家族」の枠組みにとらわれずに、すべての子どもが安心して暮らすことができる世の中になってほしいと思う。